妹は露出狂、その傾向と対策について考える兄

その２

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
妹は露出狂、その傾向と対策について考える兄

【Ｎコード】
Ｎ７３２１Ｌ

【作者名】
その２

【あらすじ】
玄関を開くとそこには一糸纏わぬ姿の妹が今にも外出しそうな出で立ちでいた。
俺はこいつの兄貴として、一体どのようにたち振る舞えばいいのか？
まさか狼にでもなるのか？

いいや、違う。
こんな時はもちろん。

“ラリアット”をかますのさ。

――R18指定になってしまいそうなジャンル“野外露出”を題材に、露出狂の妹とそれを心配してフォローに徹する兄貴の日常を書き連ねたコメディ作品。

プロローグ

俺が実の妹に不信を抱き始めたのは中学二年の秋頃だ。

小学校では最高学年の六年生であった妹は第一次成長期の恩恵も相まって、身内の俺でも分かる程に豊潤な我が儘ボディーへと成長を遂げた。

同学年の男子はやつの携えた例のブツが揺れる様を目の当たりにしただけで鼻血を噴いて昏倒した、道行く男たちは自ずと前屈みになってゆく。運動会の日に、妹が百メートル走を走ったとき、観客席の父兄たちは目が血走っていた。

そんな妹は夏の初め頃から風呂上がりには下着のみという大変大らかな姿で過ごすようになった。

最初の頃は親父がビールを噴いている様をよく見ていたが、結局は身内。

俺だって暑い日の風呂上がりはパンイチで牛乳ばかりを飲んでいるんだ。性別が変わるだけでそのたがから外したモノの考え方をしているようではフェミニズムの精神に反してしまう、古い考え方をしていたのでは移ろいゆく歴史に取り残されてしまうのだ。

しかしだ。

茹だるような暑さを俺達に提供してくれた夏が過ぎ、冬の到来を予見させる肌寒い秋が訪れてなお、我が家の妹様は例の大らかスタイルを貫き続けていた。

この頃になるとパンイチで牛乳ライフの俺だって、服を着込んで自室に逃げ込み暖房を点けるべきか否かの問題に直面しているのだ。

暑くないのに何故、あいつはあの様な寒々しい格好をしているのだろう？

疑問に思った俺は風呂上がりの妹が例の状態で居間にいすわる約二時間、不埒な考えなど一切無しに凝視してその動向を探ってみる事にした。

風呂上がりであるやつの表情は上気しており、ほっぺたはほんのりと赤く染まっていた。
気のせいかもしれないが動機もおかしかったようだった。
何故か内股を摺り合わせているようにだってみえた。
やつは時折こちらをちらちらと伺ってきた。
俺が凝視しているのだから必然的にその視線は合ってしまう。その度にボッと火でもついたように赤面していた。

以上の観察結果から中学二年生の俺が推察できた答えとは…

“非常に居心地が悪い”

という事だけだった。

その日から俺は風呂上がりの妹が居間に居座る時間帯を自室で過ごすようになり、妹とはすれ違いの生活を送ったのだった。
それから幾何かの時が流れ。俺は中学三年生、妹は中学一年生に進学した。
初めての制服に身を包んだ妹は、まだまだ幼さが残る中に芯のような何かがあるように見えた。
きっと妹も心身ともに大人の階段を駆け上ったのだろう。
何よりも彼女に一端の羞恥心が生まれた事で、風呂上がりの凶行がなくなったのが、兄として幸いだ。

結局、妹が何を思ってあんな所業を働いたのか、真相は闇に葬られてしまった。

でも兄妹の絆が復興するのであれば何んだってかまわない。
深く考えることない。
その問題は俺の記憶から溶けていってしまったのだ。

今にして思う。
あの時なぜ面と向かって話をしなかったのか。
俺が安閑とした毎日をだらだらと過ごす傍らで、理性と欲望のハザマで翻弄され続けた彼女にはとある欲求が蓄積されていったのだった。

第1話、衝撃の再会。

時が止まる瞬間というものを俺は生まれて初めて体験できたんだと思う。

それも自宅の玄関口に俺が帰り着いた矢先だ。

「……」

「……」

くそ重たい沈黙の重圧が我が兄妹の間にかかっていて。体感的には長らく時が止まっているかのように感じられた。

「あ……」

この沈黙を打ち破ろうとしたのは事の発端を担う人物、我が妹こと杉崎アヤジ（スギサキ文路）その人であった。

「あの私…」

アヤは俺と鉢合わせてしまったその時から、悪戯が発覚した子供のように震えており、なんとか弁明の一言を出そうとしていた。

「私、その…」

しかし覚悟が決まらないのか、それとも言い訳が見つからないのか。助けでも求めるように俺を見つめた。

そんなアヤに俺は眼差しだけで応えた。

“無理だ”

それは切実だった。

不意にアヤが目をつぶる。

大きく息をついて大量の酸素を体内に取り込もうとした。

そうして吐き出す。

「私、露出狂なのッ！！」

目の前にたたずむ全裸の妹は、その場で最も説得力の高い一言を大声で叫び散らした。

「下着姿でいるのが好きなのッ！！
裸でいるのが好きなのッ！！
ばれるかもしれないっていう恥ずかしさが好きなのッ！！
誰かに見られるのがたまらなく大好きなのッ！？」
叩き売りセールのように上記のセリフをポロポロッと発言していくアヤ、もはや自分でも気持ちに収拾がつかなくなっているのだろう。
玄関口は最初から隔たりもなく開け放たれているというのに、どういう状況下でどうするとどう快感を覚えるのかまで発言し始める始末だった。

とりあえず俺は事態の早期解決を目的として発端であるアヤにラリアットをくらわせた。

＊＊＊

それは休日の出来事だ。
友人と遊ぶ事を約束していた俺は、暇そうにしている妹にその旨だけを的確に伝えた。
その際、妹は何故か今までに見たことのないようなとびっきりの笑顔になっていたのだが、それが何を意味していたのか、あの頃の俺に分かるはずなどなかった。
とにかく出かけるに至った俺は満開の笑みを絶え間なく振りまき続

ける妹に微かな不信感を抱きつつ見送られ、友人の家へと旅立った。
友人とは俺が通う中学校の級友である牧野テツヤ（マキノ哲也）だった。
今回彼は飼っているセミの幼虫がめでたく脱皮の時期を迎えたので、この感動を俺にもお裾分けしたいと思い立ち、わざわざ誘ってきたのだ。
でも、俺にセミのストリップを覗きたいなどという欲求は一つも無く、半ば泣き落としのような状況で仕方無く付き合ってやることになった。

結果から言えばその末路は余りにもあっけないモノで。
テツヤの飼っているセミのアブちゃん（彼はそう呼んでいた）は、彼の実の母親の手によって葬り去られた。
……殺虫剤で。
「だってゴキ○リかとおもったんだもん」
それが母君の言い分だ。
「アブっちやああぁぁーーーーーん！！」
逝ってしまったアブちゃんを抱きかかえたテツヤは、うおおぉーーッという雄叫びと涙を残して逃走してしまった。
後に残された俺は彼の家に居座り続けることも出来ず、予定を前倒しにして帰宅する事にした。

我が家の門限は5時に設定されている。
普段の俺であったならそのぎりぎりまで遊びほうけていた筈だ。
だから、午前１１時に帰宅する羽目になるなんて俺にも“あいつ”にも予想がつかなかった。
帰宅してまずはじめに玄関口で出迎えたのは、靴を履いて出かけようとする全裸の妹だったのだ。

＊＊＊

実の兄に渾身の力で薙ぎ倒されたアヤジは、不機嫌そうに眉を歪めて居間に正座していた。
まったく、先ほどの気弱な彼女はどこへ行ってしまったのか？
開き直ってしまった彼女は、自分の行いを棚に上げてしまったようだった。
「アヤ……なんであんな事をしたんだ？」
同じ様に正座して俺は追究した。
「……兄貴には関係ない」
昔はお兄ちゃんお兄ちゃんって寄ってきて逆にうざい位だったのに、いつからお前はそんなに反抗的になってしまったんだ。
「関係ない何てこと無いだろ？　俺はお前のかぞk」
「うるさいうるさい！　私は露出狂なの！　仕方ないでしょ！？」
「仕方ないってお前…」
言い分を曲げない彼女の態度に、俺は次の言葉を失ってしまった。
まさか、自分の家族…それも妹が露出狂だったなんて、普通の神経をした兄なら易々と信じられるわけがない。
でも本人がそうだと豪語しているのなら、俺は何としてでも彼女を更生させなくちゃならない。
俺は妹が心配で仕方がないんだ。
「分かったアヤが露出狂だって云うことは認めてやる」
一歩引き下がる。
「だからとりあえず服を着てくれないか？」

先ほどは人の目が怖いばっかりに彼女をラリアットで薙ぎ払ってから、無理やりここまで引きずり入れたのだが、その際に服を着せている暇なんてなかった。
だから彼女の装いは相変わらず大胆不敵であり、端から見たら非常に犯罪チックな光景なのだ。
このままではＰＴＡに怒られてしまいそうだ。

「いやッ」
それは即答だった。
「私はこのまま出かけるの！」
とんでもない事を言ってのけている。
ここで頭ごなしに否定をしたら余計に反発するだけだろう、俺は説得を試みることにした。

「まぁまてアヤジ。今現在のレベルにその装備じゃスライムだって倒せやしないぞ。この“木綿の下着”に“布の服”、それとあと雨も降りそうだから“傘”を装備していけって」
「私は最初の装備で裏ボスまで攻略するのよ」
「お前そんな変な意地をはるなよな、初回プレイで縛りなんて自殺行為…ていうか最初の装備ってそれ人生最初の装備だからな！？」

「もう、私の勝手でしょ放っといてよ！！」
作戦は失敗だ。
逆上してしまったアヤジが居間から出て行こうとする。
そうはさせるか。

「取りあえず防具屋によろ…ぐぁっ！」
縋るように彼女の肩を捕まえた俺だったが、長時間の正座により脚

部の血流が圧迫されてしまい、それが痺れという形で我が身に降りかかってきたのだった。

俺の体は主軸を失った。

「きゃぁ！」

直前に掴んでいたモノを巻き込んで俺は盛大にずっこけた。

「いったー…」

気がつくと妹の顔がすぐ目の前に迫っていた。

どうやら俺はアヤジに覆い被さる形で倒れ込んでしまったようだ。

腰でも打ってしまったのだろうか、アヤジの表情は苦痛にゆがんでいる。

クシャッ…

すぐ近くで生卵のパックが潰れたような音がした。

「あ、お袋」

そこには今帰ってきたばかりと思しき出で立ちをした母親が床にマイバックを落っことして立っていた。

我が家の両親は両働きで、仕事が忙しいからと休日にだってなかなか帰っては来られなかった。

今日は仕事が一段落ついたのだろうか、とにかく久しぶりに一緒に晩御飯が食べられるようだ。よかった。

そこで自分達の今現在の状況を思い出す。

簡単にまとめると。

妹、裸。

俺、押し倒してる。

母、唖然。

こ、これは！？

「その、母さんね、今日は早く仕事が終わったから、晩御飯にすきやきを作ろうと、思ったのね」

「お、おお袋？」

やけにハキハキとそれだけを述べた母さんは落ちたマイバックを拾い上げた。

「でもね、卵がね、あのね…」

ふと母さんの瞳が潤んだかと思うと、そこから大粒の涙が溢れて零れた。

「また……買ってくる、ねッ」

母さんは予備のマイバックとお財布を握りしめて走り出した。

「ま、まってくれ、お袋！！　誤解だ、誤解なんだよお袋ー！！」

「我が家は二階建てよ！」

その一言だけを残して母さんは出て行ってしまった。

……とんでもない誤解をしたまま。

ベショッ……

さらに今度はバースデーケーキ的なものの潰れる音がした。

「お、親父」
そこには頭に三角のとんがり帽子を被って鼻眼鏡をかけた親父が巨大クラッカーを携えて立っていた。親父の足下には剥き出しのバースデーケーキが無残にも潰れていた。

「その、父さんはな、今日は母さんの誕生日だったからな、サプライズパーティーをな」

やけにハキハキとそれだけを述べた父さんは落ちたケーキを素手で拾い上げた。

「でもな、ケーキがな、ケーキが…」

ふと父さんの瞳が潤んだかと思うと、そこから大粒の涙が溢れて零れた。

「これ……返品してくるッ」
父さんはべちゃべちゃのケーキと領収書を握りしめて走り出した。

「お、親父。お袋の誕生日は来月だぞ！！」

「うわあああぁぁぁぁん！」

その一言だけを残して父さんは出て行ってしまった。

くそ、大変だ。
このままでは家庭崩壊してしまうかもしれない、うちの両親は繊細なんだ、早くしないと自殺しかねないぞ！
俺は早急に立ち上がった。
「アヤ、お前はここにいろ！　俺は親父とお袋をさがしてくる。絶

対にどこにも行くんじゃないぞ！」
「う、うん」
その返事だけを聞いて家を飛び出す。
たしかお袋は卵が帰る店、親父はケーキ屋に行ったんだっけか？
くそ、何で俺がこんな目に遭わなくちゃならないんだ？
「ちっくしょぉぉぉーッ！！！！」
俺の悲壮な叫びは平凡な休日の昼下がりに、どこまでもこだましていったのだった。

第2話、ショーツ無き戦い。

コチコチと正確に時を刻み続ける壁掛け時計、その短い針は丁度深夜の2時を指していた。
「なぜ、あんな事をしたんだ？」
「大丈夫よお母さん達は怒ったりしないから、ただ本当のことが知りたいだけなのよ」
親父とお袋が何十回目かの口上を繰り返した。
2人が逃走した後、俺は行きそうな場所を手当たり次第に捜した。結局、事件発生から12時間後に隣町にある公園で発見された。何故か2人揃ってブランコに乗っていたから個別に捜す手間が省けたのだった。

「……」
どう答えればいいのか分からない、俺には沈黙を守ることしかできなかった。

何とか落ち着きを取り戻した両親は事の真相を明らかにするべく、俺と妹（衣服着用済み）を正座させて詰問をはじめたのだった。
それから3時間の時が流れた、進展する兆しが見えない現状に彼らは根気良く同じことを訊ね続けた。正直申し訳無い気持ちで一杯だ。俺だって両親を苦しめたくはないのだ、事のあらましだって言える物ならふた返事で告げ口しているさ。
でも、それを言ってしまえば、アヤジの社会的地位や尊厳は脅かされてしまう。
そんな可哀想な事、血を分けたただ一人の兄貴が言ってやれるかよ。
だから、俺は……くそぉ、この手だけは使いたく無かった。

俺は両親を真っ直ぐに見つめ重たい口を開いた。

「正直ムラムラしてました、すんませんしたッ！！」

すぱぁーーんッと頬をひっぱたく清々しい音が草木も眠る住宅街に響いていった。

幸いにもこの一件は、俺1人が折檻を受けただけで収束したのだった。

＊＊＊

翌朝。

休み明けの月曜日、俺は学校へ通うための通学路を妹と共に歩いていた。

「兄貴…ごめんなさい」

「いいから気にすんな」

気落ちした様子のアヤジは俺のほっぺたを見つめる度に謝罪の言葉を口にした。

それもそうだろう、悔い改めるまでビンタをされまくった俺の頬は、世紀末のように腫れ上がっている。

それは見る者の同情心を掻き立てるのだ。

「……ごめんなさい」

何度も何度も譫言のように謝罪を繰り返すアヤジ。

「だから気にするなって、昨日みたいな事はもう二度としないって

約束してくれたらそれでいいから」
「ごめんなさい……お兄ちゃん……」
聞こえていないのだろうか？
とにかくもう一回言っておこうか、そう思って俺は妹に向き直る。
――その時、一抹の風が吹きわたった。
「私、……今ノーパンなの」
それは視覚と聴覚のダブルで痛感することができた衝撃の事実だった。
な、なんでやねん！
「アヤお前！　反省して悔い改めたんじゃないのか！？」
「……だから“ごめんなさい”って言ってるでしょ」
…あれは俺のほっぺたを労った謝罪じゃなかったのか？　余りにもあんまりな現状に対する謝罪だったってのかよ？　ちくしょー！
「このすかたん！　昨日の今日でやる奴があるか！？」
「だってだって、一度やってみたかったんだもんッ！」
俺の台詞に反応してか、またしてもアヤジはむちゃな事を開き直って言い出した。…こいつ開き直れば何をやってもいいと思っているのか？
「とにかく一旦うちに帰って下着を穿こう、な？」
取り返しのつくうちにと俺はアヤジの腕を掴んだ。
「いやッ！」
それはあっさりと振り払らわれてしまった。
歴史は繰り返されてしまうものなのか。
昨日も見かけたような展開に俺は内心気が気じゃない想いだ。

「あ、スッギー！　おっは～」
それは昨日最愛のペットと今生の別れを果たしたはずの男、級友の牧野テツヤ（マキノ哲也）だった。
傷心しているのかと思っていたがあっさり立ち直れたようだ。
彼は穏やかではない様子の我々兄妹の間に割って入り薄ら寒い挨拶とスマイルを振り撒いた。

「じゃあ兄貴、私先に行くから」
「、あ、ちょっ、アヤ！」
その隙にアヤジは俺の包囲網を突破して駆けだしてしまった。何もかもテツヤのせいだ。
くそ、このままでは妹がノーパンで登校してしまう。
「アヤジーーッ！」
俺は叫ぶ。

「とりあえず後ろ隠せー！！」

走りゆく彼女のスカートは流行に迎合していった結果、走ると丸出しになる丈しか無いのだった。

「お、おいスッギー！？」

まずいテツヤのアホがいる事を忘れていた。
まさかばれッ…
「こんな所にネギがはえてるぜ！　すげーよ、根性がやべーよ！」
そこには堅いアスファルトを突き破って一本の“ど根性ネギ”が生えていた。

俺はそれを無言で蹴り折った。

「あぁ！　ねっぎぃーー！？」

＊＊＊

1時限目の終わりを告げる終鈴が鳴り渡る。
教室の出入り口からは沢山の生徒が溢れ出した。

妹のクラス付近の柱に身を潜ませた俺は、その人混みに乗じて一学年のクラスを伺いみた。
アヤジは……いた、席に座って級友らしき少女等と談笑している。
その様子からまだなんとか持ちこたえているのだということが分かった。

俺はそう、あられもない状態の妹が心配で心配でたまらずに授業そっちのけで様子を見に来ていたのだ。
因みに俺は御年中学三年生。本年度の末には受験を控える身だが、妹の操と受験を天秤にかけたとき妹に傾いてしまうのだ。
覚悟しておけよアヤジ、お前がどんな露出行為を実行しようともこの俺が必ず阻止してやる。

そんな事を考えている間にアヤジはとんでもない行動に打って出ていた。

な、なんということだろう。
アヤジは談笑している傍らでその両足をとんでもない幅まで広げいたのだ。

……やられた。
このままでは見つかってしまうのも時間の問題だ。
でも、三年生である俺が奴の下まで赴いて足を閉めさせる事なんて不可能だ。
やった瞬間にバレる。
くそ、結婚前の女があんなに足を開いて良いのか？
ちくしょーッ！？

「お、おいあれみろよ」
すぐ近くの男子の声が聞こえた。
俺は全身の血の気が引いていくのを肌で感じた。
「う嘘…だろ」
その隣の奴も声を上げる。
まさかばれt…

「教壇にネギが生えてるぞ！」

ねぎ！？

「なんであんな所に！」
「執念よ、ネギの執念が起こした奇跡なのよ」
「ど根性ネギて名付けようぜ」

あっと言う間にど根性ネギの周りには人集りができた。
見ればアヤジの周りには級友も含めて誰も居なくなっている。
アヤジは悔しそうに下唇を噛んだ。

――助かった、まさか二回もネギに助けられるなんて。さっきは八つ当たりで蹴り折ってしまったけど、感謝するぜ。

そうこうしている間に2時限目の予鈴が鳴った。
アヤジのクラスには数学教師の江藤先生がやってきた。

「おらお前ら授業を始めるぞ席に戻れ！！」
そんな怒声を挙げれば、ネギの人集りも掃けていった。
「ん、なんだ？」
江藤がど根性ネギに気付く。
「誰だこんなところで長ネギの栽培をおこなった阿呆は、これは先生が没収するぞ」
ブチンッと引き抜かれたど根性ネギは江藤の懐に仕舞われていった。
さよならネギ、俺はお前の勇姿を忘れない。

程なくして本鈴が鳴り響く。

「ほら教科書の18ページを開け」
それだけを言うと江藤先生は黒板に向き直って、虎視眈々と何やらを書き出していった。

よし、授業中なら安心だ。アヤジも迂闊な露出行為はできないだろう。――しかしそれは甘い考えだった。

先程の露出でネギに一杯食わされたアヤジは、むしゃくしゃから更にとんでもない行動に出たのだった。

ガタッと立ち上がるアヤジ。
必然的にクラス中の視線が彼女に集まった。
一心不乱に黒板とにらめっこをしている江藤が気づかなかったのがせめてもの救いだろう。
というか、まさか我が家の妹様はこんな衆人環視の状況で何かをするつもりなのか？

よ、よせ、今の俺にはフォローなんて出来るはずがない。
俺の思いとは裏腹にアヤジの手は彼女の下半身を守るスカートのホックへと伸びる。
――終わった。
その時、神風が吹いたのだった。
「おい、みんなあれを見ろ！！」
その言葉と同時にアヤジのスカートが下へと引き落とされた。
「な、なんだと？」
男子生徒の声が挙がる。
駄目だ、無理だ、絶対バレた。
これでばれなきゃ嘘d…
「江藤のカツラが風でとばされた事により頭皮が露出し、その下に生えた力強いネギが露わになったぞ！！」
……。
「どうしてなの？　江藤先生がカツラだった事にも驚きだけど、その下のネギが生えていた事にも驚きだわ！」
「これはもしやど根性ネギを引き抜いた江藤に対する死んでいったネギの呪いじゃないのか！？」
「え！　じゃあ江頭先生は近々死ぬの？」
クラス内は騒然としている……1人と俺を残して。

うん、そう、ネギだ、ネギなのだ。
ネギだから仕方ないのだ。

…

…もう俺っていらないんじゃね？
なんかアヤジにはネギがついてるし。いいよそれで、俺は解雇でいいよ。どうせ役立たずだし。
いっそタイトルも『妹は露出狂、その傾向と対策を考えるネギ』でいいじゃん。
もうやだ。やだやだやだ。帰る！

「あ、いたいた。スッギーこんな所で何やってんだよ、もう授業始まってるぜ」
帰ろうとした矢先、俺を呼びにテツヤがやってきた。
「ん？　どうしたんだスッギー、元気ないな」
「ふふふ、笑えよ、どうせ俺は無能だよ、笑え笑ってくれ！」
自暴自棄だ。

見ればアヤジも下半身丸出しで漠然と立ち尽くしている。
なんて滑稽なんだれうか我が兄妹は、もう笑えねーよ。

だが自暴自棄になる俺とは違い、アヤジはまだ諦めてはいないようだった。
なんと――叫んだのだ。

それは耳をつんざくような、甲高い叫びだった。
恐らく、クラスはおろか校舎全域聞こえていただろう。

「な、なんだ！？」

「誰だ！」

クラス内の生徒たちはその発生源を探ろうと、ネギから視線を外しかけていた。
恐らく極限の状態でアドレナリンが分泌されたのだろう、俺にはその一分一秒がゆっくりと流れて見えた。

今回は駄目だ。
ネギではどうしようもない。
俺がなんとか――いやまてよ、今までもど根性ネギが何とかしてくれたんだ。多分奴はこの空間のどこかでスタンバっている筈だ。

「あれ、なんだこのネギ」
テツヤが足下に生えていたネギをむしり取った。
ってうおぃ！？

まずいぞ、ど根性ネギが不発になってしまった！
このままでは――本当に発覚してしまう！？

…ブチッ
俺の中で何かが切れたような気がした。
「うおおおぉぉぉぉぉぉお！！」
雄叫びを挙げてテツヤの胸倉をつかみあげた。
「え、は、え？」
そのまま渾身の力で持ち上げると…

力一杯窓に叩きつけた。

パリーンッという音、誰かの悲鳴。

「きゃー！」
「なんだ、誰か飛び降りたぞ！？」
「まじかよ、ここ三階だぜ？」
「自殺だ！！」
教室の中は騒然としている。なんとか注目を集めることが出来たようだ。
……ていうか、その。すまんかったテツヤ。

生徒達は続々と廊下に集まっていき、人混みが出来上がった。
その間を縫って教室へと飛び込むと、半裸の妹が立ち尽くしていた。
どうやら泣いているようだ。

俺は彼女に近付くと優しくラリアットをかましたのだった。

第3話、つわもの共が夢の跡。

草の根を掻き分けて踏み入った雑木林。
目の前には意気揚々と勇ゆく小スケールの奴が1人。
そいつはこの間死んだはずの男だった。

「ほらスッギー、そんな所で突っ立ってたら何も始まらないぜ！
ぼーいずびーあんびしゃすッ！」
「……」
牧野テツヤ（マキノ哲也）。
こいつは殺した筈だ。
確かに5日前、追いつめられた俺は学校の三階からテツヤを突き落
……放り投げたはずだ。
いや、別に俺はテツヤに死んでほしかった訳じゃない。でも、俺だ
って校庭の血溜まりに浮かぶ変わり果てた奴の姿を拝んでいるし、
地元のテレビでは『自殺した少年T』と報道されていたし、葬式に
も参列したし。
それがなんだ、今朝になったら電話で「うあっそぼーぜスッギー！
！」の一言を放って、返事を云う前に切りやがった。
半信半疑の俺は兎柄のパジャマを着たまま牧野家へと駆けつけたの
だった。
――そして今に至る。

「お、おいテツヤ、お前大丈夫なのか？」
「は？　いかように？」
ダメだ、大丈夫そうだけ全然大丈夫じゃないぞ。

――俺は彼を殺してしまった罪悪感から、言われるままに近くの公
園の雑木林まで駆り出されてしまったのだった。

一体なぜ、病み上がりのテツヤはこんな場所に来たがったのだろうか？

「よーしセミの幼虫探し開始ッ！　スッギーはあっちの杉の木からあっちの杉の木までを頼んだぜ。
アブちゃん2号になり得る逸材を捜すんだ！」
状況が大変よくわかった。
というか俺に拒否権は無いのか、…いや、殺されかけた筈のテツヤは恨むでもなしに誘ってるんだ、これを拒むなんて道理が俺にあるはずがない。

「よし任せろ！　体長二メートルオーバーのセミを探し出してきてやる！！」
「その意気だぜスッギー、今夜はごちそうだ！」
「「わっはっはっはっは」」
高らかな高笑いを後に、俺とテツヤはそれぞれの持ち場へと散っていった。

「あぁーッ！？」

ん、なんだ誰か入るのか？
俺は声のした方角に目を向けた。

「うおっアヤ？」
我が愛しき妹の杉崎アヤジ（スギサキ文路）が草葉の陰から飛び出してきたのだった。
……ていうか。
「何でまたそんな挑発的な格好をしてんだよぅ！？」
今回はスカートは穿いていた、そうスカート“は”穿いていたんだ。
ただその上の方が問題だった。

なぜならアヤジの上半身はワイルドに裸だったからだ。

「ひ、人違いです」
アヤジは明後日の方向に顔をそらせた。
「このあんぽんたん！　そんな奇抜なファッションセンスの奴を俺はお前以外に知らねーよ！」
すぐさまアヤジにラリアットをくらわせて茂みに薙ぎ倒した。
大変だ、大変で大変なんだ。俺は妹に急いで服を着せてから大人しく家まで送り届けなくてはならない。それを果たす為に排除しなければならい当面の障害は……

「おーいスッギー、アブちゃん2号はみつかったかー？」
そうだ、あのカス野郎をなんとかしなければ。…でもどうやって？
「んー、いたた。兄貴それ止めてっていってるのに…」
くそ、起き上がらなければいいものを…寧ろ永遠に転がっとけば良いのに、茂みに転がっていたアヤジはそこから頭だけを覗かせた。
「妹スッギーじゃん！」
「あ、兄貴の友達の無駄にテンションが高い奴」

だー！
何でこうも数奇な展開ばっかり起こりやがるんだよ。お前ら少しでいいから黙っとけよ。

…もういい、手段なんか選んでられない。

俺は遠くの方で大手を振っているテツヤに駆け寄ってその胸倉をつかみあげた。
「死にさらせぇ！！」
それを混信の力で持ち上げると、そばの木の幹に向けて叩きつけた。

「うぎゃあぁぁぁぁ！」

そんな悲鳴をあげた後、テツヤはめっきり動かなくなってしまった。
目標は沈黙した。

「あ、兄貴何を！？」
茂みから立ち上がったアヤジは困惑を露わにした様子で駆け寄ってきた、彼女のブツは彼女の動きにあわせて揺れまくっている。
「アヤジ、月曜日に約束したよな。もうしないって」
あの日テツヤをトカゲのしっぽにした俺は妹によく言ってきかせたのだ。ノーパンはよせ、と。

「だ、だから、その……ショーツは、その、穿いてるし」
アヤジは伏目がちでそれだけをいった。
「ショーツ穿いてりゃそれ以外は良いなんて道理があるか！？　とにかく早くそれを隠すんだ、上着はどこにやった？」

「……滑り台の上」

俺は雑木林から顔を出して滑り台の位置を確認する。
なんてことだろうか、滑り台は公園の中央に健在していた。
昼間だというのに滑り台の周りには近所の子供たちがわんさかだった。

「俺が回収してくる、アヤは茂みに身を隠していて」
あんな所にアヤを出せば二分と待たずに通報だ。
それだけは避けたい。

「ん、アヤ？」
返事がない。

後ろを振り返ってみると気絶しているテツヤしかいなかった。
「私は束縛なんてごめんなの！　支配からの卒業よ！！」
見れば真反対方向の公衆トイレ方面に走っていっていた。
俺は叫ぶ。
「お前まだ１２歳じゃん！！」
去り行くアヤジにその言葉は届かなかった。

＊＊＊

にげていったアヤジを追いかけるか上着を先に取りに行くのか、悩んだ末に俺は先に滑り台によってから公衆トイレに行く事に決めた。
そうであるなら早いところ回収しよう。
ダッシュで滑り台の階段を駆け上がる、しかし…
「あれ、無い」
そこには服はおろかゴミ一つなかった。
ふと、近くの子ども達の話し声が耳に入る。
「おやびん、そこの滑り台の上でこんなものを拾いました」
何だろうか、滑り台の下にたむろしていた小学生男子の１人が大柄

の少年に何かを上納していた。

「あぁん？　なんだこの窪みがついた紐は」
おやびんと呼ばれた少年は怪訝そうにソレを持ち上げる、それはブラジャーみたいな布だった、ていうかブラジャーだった。

「だあぁ！！」
よく見れば奴らが所持している布一式はアヤジの衣服じゃないか。

「おやびん、きっとそれは帽子ですよ」
「何か窪みが２つ付いてるけど？」
「二人用とかじゃないですか」
「なるほど！」
ちげー！！
そんな前衛的な帽子があってたまるか。
俺は滑り台から飛び降りた。

「君たち、その帽子はお兄さんのだから返しなさい」
できる限りの笑顔を振りまいてから請求する。
「な、なんだこいつ、おやびんなんかウサギ柄のパジャマを着た変な奴が現れました！」
しまった、俺はいまウサギ柄のパジャマを着ていた。
おやびんは既に前衛的な帽子の試着段階に至っていた。頭に乗せて顎でフックを止めているその姿は、親に顔向けができない有り様だった。
「へっ、それは俺達がこのあたりを仕切ってるウサギ団だって知っての狼藉か？」
前衛的なおやびんが凄んだ。このあたりを仕切っているドンは目も当てられない状況だ。

「おいおい、誰の了解を得てほざいてやがるんだ？
この辺りの王は我々カメ団の若頭だ！」
突然別の小学生のグループが現れた。
「はっはっは冗談は顔だけにするんだな、真の番長は俺たちインコ団の親方だぜ！」
さらに別のグループが名乗りを上げる。
「我らアルマジロ団も忘れちゃ困るぜ、うちのオジキがナンバーワンだ」
砂場で遊んでいた連中も便乗して出てきた。

＊＊＊

数分後。
自称この辺り一帯のドンとなのる小学生の団体は３０を越えていた。
「み、見ろウサギ団の奴何かかぶってるぞ」
内のアリンコ団と名乗る連中の１人がアヤジのブラジャーを指差して言った。
それを聞いて人集りに波紋が広がる。
「すげーかっけー」
「ほ、欲しい」
「なんかリーダーぽい」

それに対してウサギ団のおやびんは照れくさそうに、でも自慢げに、クルッと一回転して見せつけた。

「…このままではらちがあかない、よし、どうだろうかみんな、あの格好いい帽子を手に入れた奴が真の番長に君臨するということにしないか？」

頭脳明晰なハト団のリーダーがみんなに提案した。みんなこの覇権争いにに半ば飽き飽きしていたのだろう、異論の声は無かった。

俺はおやびんの背後に無音で忍び寄ると彼の頭からブラジャーを奪い取った。

「うわ何をしやがる！」狼狽したおやびんをそっちのけて俺は怒鳴る。

「てめーらうちの妹のブラジャーで遊ぶんじゃねー！！」

まったくとんでもない連中だ。これだからガキは嫌いなんだ。

「ぶ、ぶら…あ？」

「ぶらじあって何だ？」

「おまえ知ってるか？」

「知らねー」

そんな声が有象無象からあがる。

みんな純粋だった。

よし、何とか回収できた。

後は妹を保護してから無理やり装備させるだけだ。

「ちょうどいいぞ、あのパジャマ男からブラジアを奪った奴が帝王だ！！」

おい煽るな。
「うおっしゃー、みんな行くぞ」
いや、行くな。

どうしようもない事に盛り上がった小学生達は一斉に飛びかかってきた。
くそ、かくなる上は…

「こんなもの……飛んでけッ！」
俺は力一杯ぶん投げた……

――石を。

「あ、投げたぞ追え」
石とは気づかずにその軌道を追いかけての民族移動が始まる、さながらヌーの大群だ。
石が放物線を描いて落下したのは先程の雑木林だった。

「ぐぅ、いててて」
気絶していたテツヤが目を覚ます。

「あれ、ここは？　あれあれ。
ん？
え、ちょっ、なに？
君達なに？
ちょ、やめ、やめッ
いぎゃあああぁぁぁぁぁぁあ！！？」
暴動に巻き込まれて、テツヤは藻屑と消えた。
すまないテツヤ、不可抗力だ、ゆるせ。

心の中で僅かに謝った、何だかんだでテツヤには悪いことばっかりしている、こんどアイスとか奢っとくか。
暴動の砂煙を尻目に俺は上着の一式を回収すると公衆トイレに向かった。

＊＊＊

「……兄貴、ごめん」
「分かればいんだよ、分かれば」
トイレで見つけたアヤジは説得（主にラリアット）のかいあってか、しっかりと反省した様子だ。
今はちゃんと上着も着用して落胆している。

何でも少し前辺りからここの公園で露出行為をする事が日課になっていたのだそうだ。
本当にとんでもない妹だ。
次からはこんな事がないように監視の目を光らせておく必要があるな。

「ほら帰るぞ」
「はーい」
彼女の袖を引いてトイレから連れ出した。
…
トイレから出てみるとそこは血の海になっていた。あちらこちらに

鼻血を噴いて亡骸が転がっている。

「あ、兄貴、これ…」

その地獄のような惨状にアヤジもたじろいでいるようだ。

「……」

俺達は無言で公園を後にした。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7321l/

妹は露出狂、その傾向と対策について考える兄

2010年10月10日13時19分発行